

## 観光まちづくりのライフ・サイクル

### 一別府市・湯布院町の観光まちづくりにおける都市計画的要素—その1—

正会員○安藤万葉<sup>\*1</sup> 同 姫野由香<sup>\*2</sup> 同 牛苗<sup>\*3</sup> 同 大堂麻里香<sup>\*1</sup>  
準会員 同 西悠太<sup>\*4</sup> 同 林孝茂<sup>\*4</sup>

#### 7. 都市計画—99. その他

観光まちづくり 温泉地 ライフサイクル

#### 1 研究の背景と目的

観光は現在の日本を支える主要な産業の一つであり、地域経済を支える主要な経済活動である<sup>1)</sup>。2003年に、観光立国懇談会で出された「観光立国宣言」以降、全国各地で経済活性化策の柱として、地域資源を活かした一層の観光振興が図られており、地域に大きな利益をもたらしている<sup>2)</sup>。また、日本交通公社が公開している「旅行年報2016」では、観光の主な目的として、「温泉」、「自然や景勝地の訪問」、「歴史・文化的な名所の訪問」等、その土地ならではの文化や、自然風土などの魅力を体験することが、上位を占めている。つまり、観光客や観光による地域収入を確保するためには、宿泊を伴う滞在型観光の推進は有効であると考えられる。これにより、経済波及効果が期待できるなど、観光による地域振興が期待できる。

一方、観光は、地域資源を利用し消費する側面を持つ<sup>1)</sup>。ゆえに、行き過ぎた観光地の開発や観光資源の管理不足などにより、地域資源である自然資源や文化的景観などが破壊され、観光地としての魅力を下げってしまうなどの問題も発生している。そのため、地域資源を保護し、その魅力が損なわれないように、規制やルールを備えた観光まちづくり<sup>注1)</sup>を行っていくことも重要であると考えられる。

先行研究<sup>1)</sup>では、観光まちづくりのライフ・サイクル(変遷)と計画手法からみた観光戦略の傾向を考察している。また、観光地のライフ・サイクルや、取り組まれた施策に関する研究は、複数確認できる<sup>3,4)</sup>。しかし、温泉観光地を対象とし、温泉地ならではの観光地の価値を表す指標を用いて、ライフ・サイクルの把握を行った研究は見られない。

そこで本研究では、温泉観光地における観光まちづくりの変遷として、都市計画や様々な取り組みがどのような時期に導入され、役割を担ってきたのかを明ら

かにする。

#### 2 研究の方法

##### 2-1 研究の方法

本研究では、観光地の衰退と発展に見られる周期的な推移を説明する仮説<sup>5,6)</sup>と、観光地の価値理論<sup>7)</sup>を用いて、対象地域の観光まちづくりのライフ・サイクルを把握する。大分県の別府市、湯布院町の観光まちづくりに関する取り組み、観光客数、入湯税の推移を年表にまとめることで、観光まちづくりに関する取り組みが、ライフサイクルの把握に与える影響を確認する。

##### 2-2 対象地域

本研究では、全国的にも有名な温泉観光地である別府市と由布院市湯布院町をケーススタディの対象とした(図1)。別府市は温泉が市内各地で湧出し、源泉数と湧出量がともに全国1位を占めており、温泉資源を求めて、観光客が毎年700万人以上訪れる観光都市である。一方、由布院市湯布院町は町内に、由布院温泉、湯平温泉、塚原温泉の3つの温泉群があり湧出量は別府に次いで、全国2位である。また、住民の暮らしやすさを重視し、「住み良い町こそ優れた観光地である」という考えのもと、独自の保養温泉地を形成してきた地域である<sup>8)</sup>。



図1 別府市・由布市の地図

#### 3 観光地の価値

##### 3-1 観光地の価値

観光まちづくりとして、取り組まれた事柄に基づく、対象地域の変遷をとらえるために、「観光地の価値」に注目する。観光地の発展に見られる周期的な推移を説明する仮説の一つに、観光地理学者 R.W.Butler のライフサイクル曲線がある(図2)。観光地の衰退と発展をI地域に観光客用の施設がなく、探検家のような旅行

客によって発見される【探索段階】、Ⅱ観光客が増え、住民が観光関連産業に参与する【参加段階】、Ⅲ観光地が宣伝されるようになり、観光市場が明確に形成される【発展段階】、Ⅳ観光客は増加するが増加率は減少する。観光施設に対する住民の反発や不満が生じる【確立段階】、Ⅴ地域で受容できる観光客数が限界に達し、これにより環境・社会・経済の諸問題が生じる【停滞段階】を経て、観光地は再生または衰退に向かうという仮説である。

一方で、安島の観光的価値論（図3）では、興味や関心を強く惹かれる場所や話題性など、消費され減衰しやすい【精神的価値】と、身体に感じる快感を伴うものである、気候風土や自然資源などの消費されにくい【身体的価値】の大きく二つがあるとされている。

また、図3では「観光地の価値」を観光客数で表しているが、安島は「その観光地・施設に行ってみたくて望んでいる人の欲求の総和」と定義している。

R.W.Butlerのライフ・サイクル曲線、安島の観光的価値論ともに、横軸に「時間経過」、縦軸に「観光地の価値」をとったモデルである。

さらに、「観光地の価値」は、観光客数、再訪率など、様々な指標に置き換えて考えることもできる。本研究では、時系列の情報取得しやすい観光客数<sup>注2)</sup>と温泉観光地における宿泊客数を示す入湯税<sup>注3)</sup>を観光地の価値を表す指標として用いることとする。

### 3-2 入湯税について

本研究では観光地の価値を表す指標の1つとして入湯税を用いた。入湯税は、別府市、湯布院町の何れの地域においても、1957年から適用されている市町村の目的税である。温泉観光地において、温泉は主要な地域資源であるため、温泉の利用量を示す入湯税の増減は、温泉を求めて来た宿泊客や観光客の増減を表すことができると考えられる。つまり、入湯税は温泉地観光地において、観光地の価値を表すことができるの

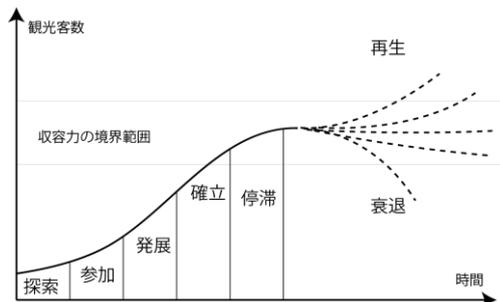


図2 R.W.Butlerのライフサイクル曲線

ではないかと考える。

## 4 別府市・湯布院町の観光まちづくりの変遷

別府・湯布院町の観光地が現在にかけてどのような取り組みがなされているのかを確認するために、精神的価値に関係するイベントや施設整備、身体的価値の保護に関する構想や計画制度の策定などの出来事を、年表にまとめ、期間分けを行った（表1）。さらに、期間ごとに考察を行う。

### 4-1 別府市の観光まちづくりのライフ・サイクル

【成熟期】67年には城島モートピアランド、76年には九州自然動物公園アフリカンサファリが開園するなど外部企業の進出が続き、その年には観光客数が最も多い1300万人を超えた時期である。一方入湯税については、別府市ではまだ81年から調査が開始されているため、この期間では入湯税の総額が確認できない。

【停滞期】76年以降、観光客数が停滞した。また、総合運動場や体育館の竣工という地域住民に対する施設整備が多く、市民の生活環境の向上を図ろうとした時期であると考えられる。一方、入湯税の総額は81年から確認でき、観光客数と同様の軌跡をたどっていることから、温泉や宿泊を目的とした観光客が停滞している傾向にあることが推察される。

【衰退・模索期】バブル崩壊後93年には、観光客数は1080万人程度まで落ち込んだ。地域の方向性を模索するように、新たな施設の竣工や、従来の施設のリニューアル、イベントの開催などが多い時期である。92-93年にかけて条例や計画などを策定し、地域の身体的価値の向上につながる取り組みも始まった。また、観光客は増減を繰り返しながら増加しているが、入湯税は減少している。つまり、観光客が来ても、温泉や宿泊施設を利用していないということが推察される。

【再生期】観光客数と入湯税は微増減を繰り返しながらも2010年以降は増加傾向にある。以上のことより、温泉や宿泊を求めてやってくる観光客が戻りつつある

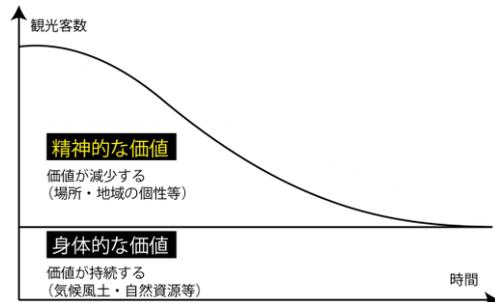
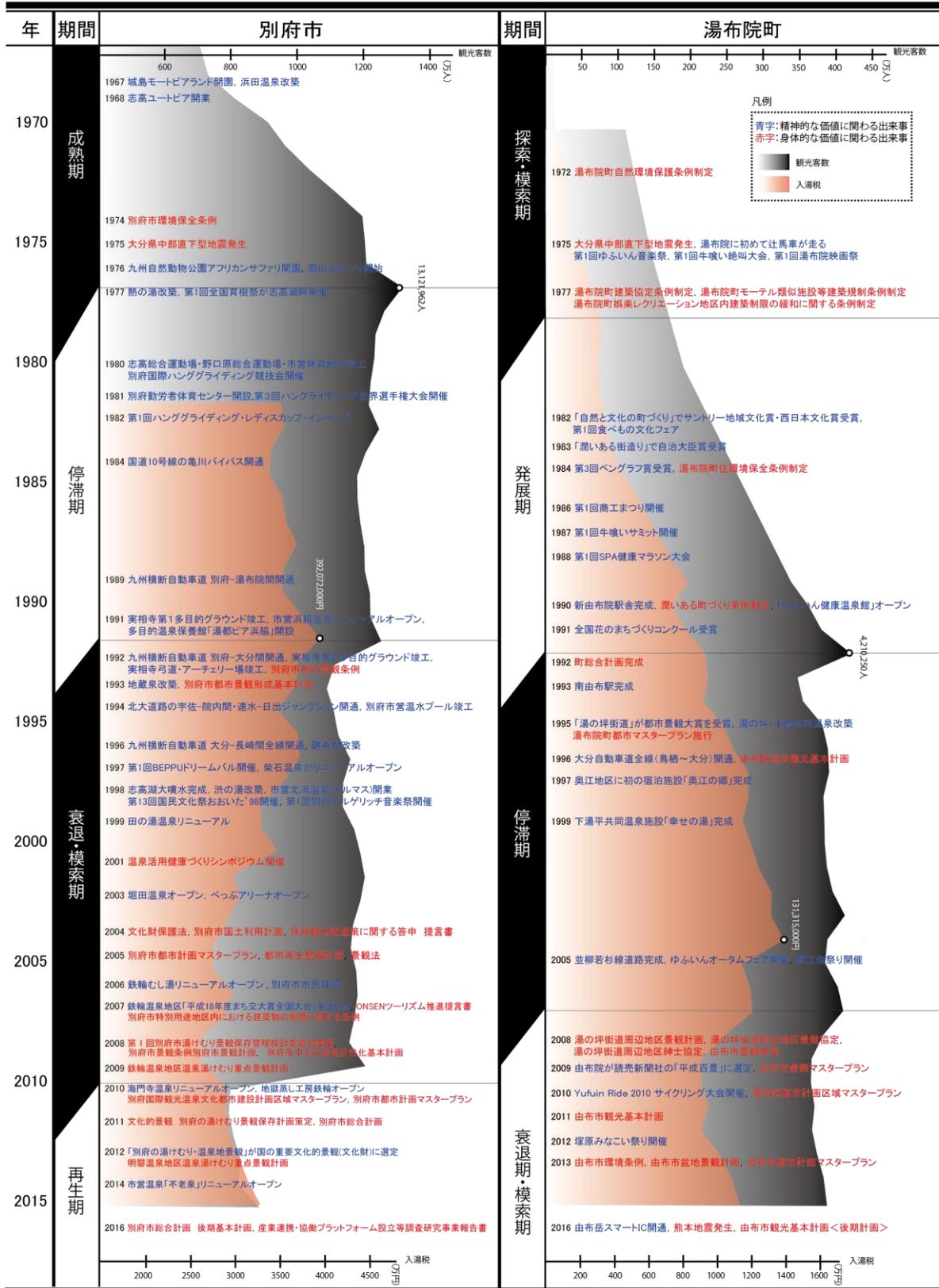


図3 安島博幸の観光地の価値のモデル

表1 別府・湯布院のライフ・サイクル



時期であることがわかる。また、2012年に湯けむり景観が重要文化的景観に指定され、保護活動が始まり、身体的価値の向上に努めている時期でもありと考える。

別府市は、現在は再生期であるが、それを持続するためにも、身体的価値の維持・向上に加え、精神的価

値の向上につながる新規イベントの創造や施設の開設なども重要となってくるといえる。

一方入湯税は、温泉施設や観光施設の完成や改築が多い90年代前半にかけて増加しており、91年には約4億円のピークに達した。しかしその後、2008年で落ち

込むが、2010年から再度、増加傾向にある。2010年の、温泉噴気を利用した地獄蒸し工房のオープンや、2012年に、湯けむりが重要文化的景観に選定されたことによる、精神的価値の向上により宿泊者数が増え、結果として、入湯税の増加につながっていると考える。

#### 4-2 湯布院町の観光まちづくりのライフ・サイクル

【探索・模索期】75年に辻馬車の運行や、牛喰い絶叫大会、映画祭などのイベントを開催することで、観光に関する地域の方向性を模索し、精神的価値の向上に努めた時期である。それに伴い、観光客・入湯税はともに、徐々に増加をしている。

【発展期】観光客・入湯税がともに急増した時期。82年に「自然と文化の町づくり」でサントリー地域文化賞を受賞するなど、これまでの取り組みが評価され、様々な賞を受賞をした。また、各種イベントも開催され90年には潤いのある町づくり条例を策定した。受賞による精神的価値の向上とともに、条例により町民の健康で文化的な生活の維持・向上を図った時期である。

【停滞期】92年に観光客が420万人に達するが、次第に減衰する。共同温泉や宿泊施設の新設により観光客・入湯税ともに上昇する。急増した観光客による環境問題も顕在化し、田園風景などの身体的価値が危機を迎えていた。そのため、96年には湯布院温泉観光基本計画を策定し、課題改善に取り組んだ時期である。

【衰退・模索期】2007年には観光客が410万人まで達したが、入湯税・観光客数ともに減少している。2008年には湯の坪街道周辺地区<sup>注4)</sup>で問題となっていた街道景観の混乱や、歩行者の安全性・生活環境の悪化を改善するために、協定や景観計画が策定されている。

湯布院町の事例から、衰退されにくいと考えられる身体的価値も、急増する観光客による環境問題の悪化などにより、衰退する可能性があることが分かる。また、これから湯布院町が、再生に向かうためには、環境や地域資源を保存、管理することによる身体的価値の維持・向上だけでなく、【探索・模索期】で見られたような、新たなイベント等による精神的価値を創造していくことも重要であることが分かる。

一方入湯税は、2004年頃までは観光客数と同様に増

加を続けており、約1億3千万円でピークに達した。その後、減少傾向にあり、2009年には約9千万まで落ち込むが、別府市と同様に現在にかけて、増加していることが確認できた。このことより、日帰りの観光ではなく、湯布院への宿泊を目的とした観光客が増加傾向にあることがわかる。

## 5 総括

本研究では、観光地の衰退と発展に見られる周期的な推移を説明する仮説と、観光地の価値理論を用いて、別府市と湯布院町における観光まちづくりのライフ・サイクルを把握した。別府市の【衰退・模索期】、湯布院町の【停滞期】や【衰退・模索期】を見ると、何れの観光地も、別府市都市景観条例、湯布院温泉観光基本計画や湯の坪街道周辺地区景観計画などの、都市計画や計画手法は主に身体的価値の維持・向上のために利用されていることが分かる。また、湯布院町において、観光客数と入湯税は同じような軌跡であることが確認された。このことより、湯布院町に訪れる観光客は温泉や宿泊を伴う滞在型観光を志向していることがわかる。一方別府市では、観光客数と入湯税は、【衰退・模索期】において、同じ軌跡をたどっていないことが確認できた。これは、【衰退・模索期】に高速道路の整備が進んだことで、自動車で訪れる観光客が増加し、日帰りの観光客が増加したためではないかと推察できる。

### 【補注】

- 注1) 観光まちづくり：観光に関する「交通」、「宣伝・広報」、「観光政策」、「観光資源」、「観光資源の保護」の4項目に関するまちづくり。
- 注2) 別府市は観光動態要覧を参照した。また、湯布院町は観光客入込客数及び旅館数調書を参照した。
- 注3) 入湯税について、別府市は市税概要を参照した。また、湯布院町は昭和60年までが地方財政状況調査票及び決算カードを、昭和60年から平成1年までは市町村税徴収実績、平成2年から平成16年までは地方財政状況調査を、平成17年から平成27年までは入湯税の使途状況等に関する調査を参照した。
- 注4) 湯の坪街道周辺区域の対象区域は、由布市市道前徳野岳本線（通称『湯の坪街道』）を中心とした区域のことを指す。

### 【参考文献】

- 1) 姫野由香、大堂麻里香、西悠太、観光まちづくりのライフサイクルと観光戦略の傾向、pp.9-12、2016年度日本建築学会大会（九州）都市計画部門研究懇談会資料、2016
- 2) 塩谷英生、観光消費の経済効果の推計：観光統計の現状とTSAの登場（特集）観光とOR、pp.17-22、オペレーションズ・リサーチ：経営の科学50（1）、2005
- 3) 緒川弘孝、貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論、pp.189-201、北海道大学観光学高等研究センターCATS 業書 No.3、2010
- 4) 太田隆之、解説：観光地のライフサイクルとそれに伴う政策課題の動態的変化—下田市を事例に—、pp.1-26、静岡大学経済研究15巻3号、2011
- 5) R.W.Buttler, The concept of tourism area cycle of evolution implications for management of rescuers, pp.5-12, Canadian Geographer Vol.21, No.1, 1998
- 6) 毛利公孝、石井昭夫 翻訳：観光地域の発展周期に関する考察：観光資源管理のための一市視点、pp.98-103、立教大学観光学部紀要第4号、2002
- 7) 安島博幸、観光地の価値の生成過程に関する理論的考察、pp.285-288、第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集、2014
- 8) 池内秀樹、朽木弘寿、「観光まちづくり」の成果と課題—湯布院温泉・黒川温泉を事例として—、pp.155-174、地域創成研究年報2号、2007

\*1 大分大学大学院工学研究科博士後期課程 大学院生  
\*2 大分大学工学部福祉環境工学科 助教 博士（工学）  
\*3 大分大学大学院工学研究科博士後期課程 大学院生  
\*4 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

Graduate Student, Oita Univ.  
Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng  
Doctoral Course, Oita Univ.  
Undergraduate Student, Oita Univ.